

みのわ

- 本調査は、建設省による一般国道八号柏崎バイパス建設工事に伴



齋串・人形、「上殿」「勅

- 8 木簡の釈文・内容

- (1)

(6)

・「牒 小池御×

右依収今月六日

早送□助□

故牒々到達状

(90)×(36)×3 081

(1)は、上端および左右辺は原状をとどめるが、下端は欠損する。表面の「宅」も裏面の「家」も、ハ(うかんむり)の二画目を長く、广(まだれ)のように書いている。表面の「応」の次の文字は、墨痕不鮮明だが、「勘」の可能性がある。裏面の「駅」の字形は、平城宮木簡に類似例がある(『平城宮木簡三』三三三一号木簡)。本木簡は「三宅史御所」を宛先とする「牒」の文書木簡である。表面は、「まさに□出すべき事」という事書きに続けて、出すべき物品名(米など)を書き、「三宅史御所」に対して物品請求を行なっているものと考ええる。さらに、裏面に「駅家村に到来すべし」とあることから、その物品を「駅家村」に運ぶよう命令しているのだろう。命令を受けた「三宅史御所」では、本木簡を持参して駅家村に赴き、「駅家村」で木簡は廃棄されたと考えておく(6)の理解も参照)。

「三宅史」^{みんけのふち}は、『新撰姓氏録』河内国諸蕃や、延喜八年(九〇八)「周防国玖珂郡玖珂郷戸籍」(『平安遺文』一、一九九号文書)に見える。越後国では、『続日本紀』延暦三年(七八四)一〇月戊子条に蒲原郡の人として、姓を異にするが「三宅連等雄麻呂」が見える。ま

た、『延喜式』神名帳には、古志郡の式内社として「三宅神社」が記されており、長岡市妙見町、同市六日市町に比定されている(『式内社調査報告』第一七巻、北陸道三 皇学館大学出版部 一九八五年)。

また、「駅家村」は、文献・出土文字資料を通じて初見である。

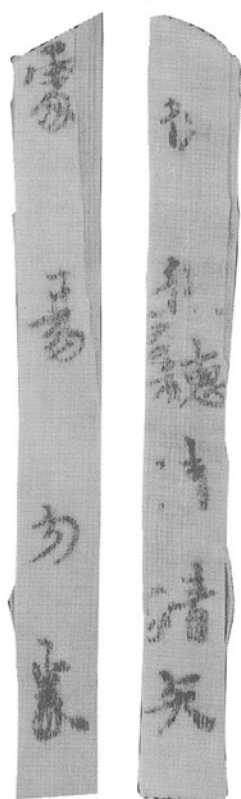
類例には、「駅家郷」(『平城宮発掘調査出土木簡概報』三二)、「駅里」

(『飛鳥藤原宮発掘調査出土木簡概報』三)などがあり、駅戸の集団と考えられている。このことから、箕輪遺跡の付近に駅家が存在していたと考えられる。『延喜式』所載の越後国の一〇の駅家のうち、三嶋駅は、比定地は確定してはいないが、およそ柏崎市近辺とすることで諸説一致していた。今回の木簡の出土によって、箕輪遺跡近辺に三嶋駅が存在していた可能性が強くなった。

(2)は、上端および右辺を欠損する。また、中央部付近で折れている。表面には、「伊加忍上神」と神名を記している。

(3)は、上端および右辺を欠損する。一行目は、文字の右半分を欠いているため解説が困難だが、最後の文字は、「神」と読めそうである。(2)(3)ともに「十」のような記号を記すが、意味は不明である。神名や、(3)に見える「死」「得罪」という語句から、呪術的なものと考えられる。

(4)は、上端の切り込み部分左側を若干欠損するが、ほぼ完形である。二文字目は、「未」であるが、ウジ名や地名に「石木部」があり(『長岡京木簡二 七八九号木簡・『平城宮発掘調査出土木簡概報』二二)、



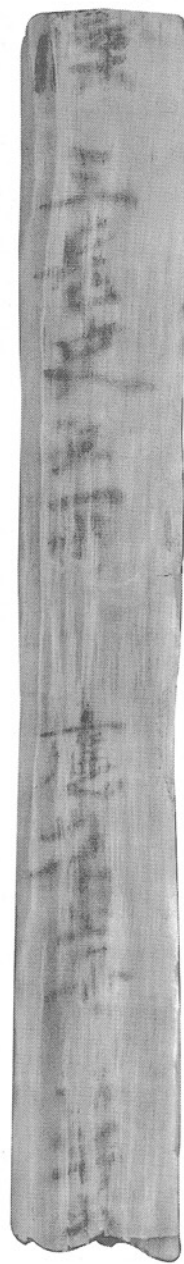
(5)



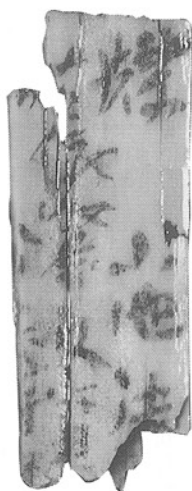
(4)



(1)



(6)



(いずれも赤外線画像)



(3)

(2)

本例も「石木部」と考える。ウジ名「石木部」は、越後国では初見である。「大調」は、人名と考えるが、貢納物としての「調」に尊称の「大」をつけている可能性もある。

(5)は、上端および左右辺を欠損する。裏面には、文字の一部に「勿」を有する文字を間隔をあけて書き連ねている。「処」「券」はそれぞれ、「勿」を含む異体字につくっている。

(6)は、五片の断片に割れているが、上端と右辺は原状をとどめる。左辺と下端は欠損する。「牒」の下を一字分あけて「小池御^(所カ)」と

充所を記し、裏面には「故牒々^レ到准状」と、牒の書き止め文言を記す。内容は明確にしないが、表面の「依^レ収」や裏面の「早送」という文言から、何らかの物品を送ることを命じたものと考ええる。

なおこの牒木簡の宛先は、(1)の宛先と異なっており、宛先を異にする二点の牒木簡が同一遺構から出土している。これら二点の牒木簡は、木簡の宛先で廃棄されたのではなく、宛先から物品などと共に木簡の差し出し元に戻ってきて、そこで廃棄されたと考えられる。

なお釈読にあたっては、新潟大学の小林昌二氏・相沢央氏のご教示をいただいた。本稿の「8木簡の釈文・内容」は、関係文献中の相沢央・小林昌二「箕輪遺跡出土木簡」を要約したものである。

9 関係文献

(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成一一年度』(二〇〇〇年)

(高橋 保)